

マルティン・ルターの取り組んだこと

学院宗教部長・大学宗教主任
大島 力
OSHIMA Chikara



昨年(2017年)は「ルターの宗教改革500年」の記念の年であった。ルターの取り組んだことは広範囲に及ぶが、それは現在のキリスト教会においても継続されるべき課題である。ルターの改革は決して一時的なことではなく、各時代の教会がまさにその状況の中で果たすべき事柄である。そのような視点から、ルターを、「聖書翻訳者としてのルター」「説教者としてのルター」「説教者としてのルター」という三つのことに焦点を絞って論じてみたい。

「聖書翻訳者としてのルター」

ルターは改革運動の渦中に、ワ

節)。これは2017年改訂のルター訳聖書によっても引き継がれている。従って、翻訳は一つの解釈であると言われ、それはルターのドイツ語訳新約聖書においても正に言えることである。翻訳は解釈であり、注解の始まりである。ルター訳聖書には最初から今日に至るまでそのような意義があるのではないかと思う。他方、ルターは1522年以降、直ちに旧約聖書の翻訳に取り掛かった。それは困難な作業であり、12年間の歳月を要し、しかもヴィッテンベルク大学の同僚であるメランヒトンやヘブライ語学者たちとの共同作業であった。また、この時のヘブライ語原典は、おそらくラビ聖書(1517年!)の第二版である第二ラビ聖書であると思われる。いずれにせよ、それはグーテンベルク以降の活版印刷によるヘブライ語聖書であった。

そして、ついに1534年に旧約新約聖書がすべて訳されて合本で出版された。このことの意義は大きく、その後、英語を始めとする各国語に、原典から聖書全体が翻訳されていくモデルとなったと言えよう(ジュネーブ聖書1560年、あるいはジェー

ルトブルク城に匿われていた時期があった(1521~22年)。大変に危機的状況であったが、その間に新約聖書をギリシア語原典から翻訳することになった。その意味では、この危機は聖書翻訳の歴史にとつては画期的な成果をもたらしたと言える。その時、ルターの手元には、ヒエロニムスに由来するウルガタ版のラテン語聖書(405年頃)、そしてエラスムスが校訂したギリシア語聖書(1516年)、また、そのエラスムスによるラテン語訳聖書(1516年)があった。ルターはその三つの資料に基づきながら10週間で新約聖書全体を翻訳したのであった。これ

ムズ王欽定訳聖書1611年等)。

「聖書講義者としてのルター」

(ルターは旧約学者であった?)

ルターは1512年、ヴィッテンベルク大学の聖書教授となった。彼が最初に取り上げたのは旧約聖書詩編であった(「第一回詩編講義」1513~15年)。そこで、後の神の義に関する「宗教改革的転回」への糸口を見出した。それゆえ、続いて「ローマ書講義」「ヘブライ書講義」へと進むのであるが、その後、再び詩編講義に戻っている(第二回詩編講義)。

それ以降、ルターは新約聖書の講義を、同僚のメランヒトンに委ねて、基本的には生涯に亘って旧約聖書の講義を続けた。1531年の「ガラテヤ大講解」はむしろ例外である。そして最後に、ルターは死の前年まで、創世記講義を続けた(1536~45年)。そこから、敢えていえばルターは「旧約聖書学者」であったというテーゼも成り立つかも知れない(キリスト教思想家・金子晴勇氏の指摘)。このことは、ルターが旧約新約聖書全体を常に重視していたことを示すと同時に、ルターの新

はものすごい集中力であると言える。そして、1522年9月にヴィッテンベルクで印刷・出版され(2000~3000部)、ただちに売り切れとなり12月には改訂版が出されている。もちろん、このルターのギリシア語原典からの翻訳は、当時、唯一の権威であったウルガタ版ラテン語聖書より原典に即し正確なものであったことにその意義があるが、後年、ルター自身が語っているように、その翻訳は「民衆の口の中をのぞき込んで、適切な表現を探したものであった。それゆえ、ルター訳新約聖書は決して直訳ではない。ルターが原典にあたり、それを当時の民衆の心に

しい神学的発想がしばしば旧約聖書に基づいてなされたことからも言える(「あなたの義によつてわたしを助けてください」詩編31編2節、「神の異なる業」イザヤ書28章21節、「神の背面、つまり背中」出エジプト記33章20~23節、列王記上19章11、12節を参照)。

「説教者としてのルター」

ルターはヴィッテンベルク町教会での説教と並行して、「家の教会」においても説教をしていた。これは元修道院であった「ルターハウス」における礼拝であり、そこには家族だけではなく寄宿の学生や滞在者、使用人など30~40人が集まっていたようである。

その「家の教会」の礼拝説教は、聖書日課(主として福音書)によって行われていた。それは大学における聖書講義とはかなり違ったものであった。聖書講義は、聖書箇所を順次解釈し、解説していく方法がとられているが、「家の教会」での説教は、その聖書講義の要約ともいえるべきものであった。それは、特に「キリストの福音」に集中し、分かりやすい言葉で、その

響く表現で翻訳したことが重要なことである。20世紀の思想家ベンヤミンはこう述べている。翻訳の使命は「原典の意味になるべく近い言葉を提供すること」ではなく、「原典が起こそうとした事件を他の言語でも起こそうとすること」である。これはまさにルターが行ったことであり、その事件・出来事(イエス・キリストの出来事)が、500年前に当時の状況の中で、ドイツ語で起きたと評価できる。たとえば、ルターはパウロの「信仰によつて」という言葉に、「のみ」*allein*という語を補って「信仰のみによつて」と訳している(ローマの信徒への手紙3章28

福音がまず告知されるというものであった。そして、それに基づく応答として、具体的な生活への勧めが語られたという。ここにはルターの牧会的・教育的配慮が見取れる。従って、ルターの説教から学ぶことは、聖書日課による説教であろうと、連続講解説教であろうと、その聖書箇所から説教者が聞き取り、受け止めた福音を第一段階で鮮やかに語ることが必要であるということである。その後に、必要な倫理的勧めもまた語ることができるのである。ここに有名な『キリスト者の自由』に展開されている「自由と愛」という神学的内容が説教において実践されていると言える。

ルターは、とりわけ聖書翻訳者であり聖書講義者であったが、最終的には「あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によつて互いに仕えなさい」(ガラテヤの信徒への手紙5章13節)というパウロの言葉を生涯に亘つて実践しようとしたと言えるであろう。これは現代のキリスト者の課題であり、キリスト教学校の目指す道でもあると考える。